

鹿児島方言に現れる対人配慮表現とその共通語対訳の検証

－鹿児島県立図書館方言採録テープより－

川崎 加奈子

Expressions of Politeness in the Kagoshima Dialect
and their Standard Language Translations

-An Research based on the Kagoshima Prefectural Library Dialect Compilation Tapes-

KAWASAKI Kanako

Abstract / Short Outline

The Dialect Compilation Tapes, a dialect corpus housed at the Kagoshima Prefectural Library, is a compilation of conversations among elderly people in different regions of Kagoshima prefecture, whereby transcribed conversations are displayed alongside their standard language translations. In this paper, an analysis of the semantics of expressions of politeness (attitudinal expression) used in the section of the corpus titled “Kagoshima City Dialect: Language Used with Peers/Friends” was performed, and their standard language translations from the perspective of a speaker of the dialect was verified. Interest in sentence ending particles in the Kagoshima dialect was the inspiration for this paper as they combine with the preceding form to demonstrate respect for the listener. Considering the intention of the corpus, which is to record the dialect before it becomes extinct, it is important that the standard language translations maintain the meaning of each linguistic marker as accurately as possible. This analysis indicates that it is necessary to further verify and revise the notation conventions used to transcribe recorded speech.

キーワード：鹿児島方言、待遇表現、共通語対訳

1. はじめに

鹿児島県立図書館所蔵の『方言採録テープ』は、鹿児島県内の各地方の方言による会話を収録し、その『共通語対訳本』が作成されている方言コーパスである。この『方言採録テープ』の詳細は児玉(2010)に詳しいが、昭和46(1971)年から昭和60(1985)年までに随時採録された音声で、鹿児島県の方言が当時の市区町村毎に収録されている。これらの資料は、方言が消えつつある今日、その量の豊富さと談話形式の多様さから資料的価値が高く、地域に住まう人々にとっても郷土を思うよりどころとして貴重な財産であると言える。とはいうものの、当該テープに付随する『共通語対訳本』上の音声文字化データとその対訳の妥当性については検証された形跡がほとんど見られない。

この『方言採録テープ』の目録の「刊行のことば」には、「方言が急激な社会変化の中で忘れ去られ、死語になろうとして」おり、「それだけに、本館(筆者註：鹿児島県立図書館)の方言テープが多くの方の目にとまり、調査研究に役立ち、また方言への関心を持ってもらう契機」となるべく採録テープと対訳本を公開する旨の記述がある。筆者も鹿児島方言話者であり、同「刊行のことば」にある

「方言は、その地域の風土・歴史・生活・文化等と深く結びついた、貴重な文化遺産」であり「地域に住んでいる人々の魂の根源で」とあるという文言に深く共感するものである。

折しも2018年1月からNHK大河ドラマ『西郷どん』の放映によって鹿児島方言への注目が集まっていると聞く。『方言採録テープ』と『共通語対訳本』の記述について改めて見直しを行うことによって、鹿児島方言の時間経過による変遷や採録当時の情報の正確さなどを検証するには、今が絶好の機会なのではなかろうか。

本稿では、特に終助詞の対訳を中心に検討を行う。中西（1993）は「終助詞」を「文末詞」と置き換え、「文末詞は文表現を特定化し文としての叙述構造を集約すると共に、待遇表現として全的に集約し、これを相手に訴えかけるものである」とし、特に文末詞の研究・考察に対する待遇的視点の必要性に言及している¹。本稿はその論に示唆を得、終助詞の対人配慮性を中心にその意味を考えようとするものである。方言の終助詞について、井上（2002）は、意味記述のための蓄積がまだ十分ではないので、“とりあえず”としながら、使用頻度が高く、母語話者にとって内省しやすい終助詞から分析を行うことが得策であるとする²。筆者は音声学者でも方言学者でもない。しかし、日本語教育に携わる方言話者としての視点から、共通語対訳の検証に一石を投じ得るのではないかと考える。拙稿がこの『方言採録テープ』が貴重な文化遺産であることを報告する一助となれば幸いである。

2. 調査対象：『方言採録テープ』と『共通語対訳本』

2.1 資料概要

鹿児島県立図書館所蔵の方言採録テープには、前述の通り、昭和46年から昭和60年までに随時採録された鹿児島県内の各市区町村の方言による会話が収録されている。市町村それぞれに0～11本ずつ、計160本の音声テープが存在し、テープ毎あるいは複数のテープを一冊にまとめた共通語への対訳本が95冊、共通語対訳テープ5本、抄出・概略・解説等の冊子が7冊、解説テープ2本の存在が目録に記載されている³。このテープ及び対訳本は、鹿児島県立図書館の方言ライブラリーコーナーで試聴閲覧ができるようになっている。

本稿は、調査対象を当該テープのうち昭和46年に採録された『1－3鹿児島市方言 同輩・友人の言葉』（以下、「本巻」）のテープ（以下、「当該テープ」）と、その音声を文字化して平成7年に刊行された『共通語対訳本』（以下、「当該対訳本」）とする。

当該対訳本は、活字ではなく全て手書きによるが、公開されているのは手書きの原本ではなく手書き原稿が印刷されたものである。上下2行が一组となり、上の行に当該テープ音声を文字化したもの、下の行にその方言を共通語に逐語対訳したものが書かれている。巻を通して1ページに8組の鹿児島方言と対訳が記録されており、全97ページに及ぶ。方言と対訳は、ほとんどが文節の始まりの位置が揃えられており、一言一句、どの方言がどの共通語に該当するのかが確実に見極められるようになっている。話者が誰なのかの記録はなく、明らかに話し手が交替している場合は「 」によって話者の交替が記録されている。同時に二人以上が話す場面では、よく聞き取れる発話のみが記録され、聞き取れない部分は方言部分に空欄もしくはクエスチョンマークが書かれ、その不明部分の対訳は空欄となっている。

尚、「共通語」という用語には議論の余地があるが、この『方言採録テープ』のシリーズでは「標準語⁴」と同義で使用していることは明らかである。また、広く鹿児島では「標準語」の意味で「共通

語」を使用する傾向がある。「共通語」「標準語」の用語に関する議論は本稿の目的から外れるため、本稿では、『方言採録テープ』シリーズの使用に倣い、本巻の対訳に関する記述に関しては「共通語」を「日本の標準語」の意味として用いることとする。

2.2 方言の話し手

当該テープの音声では、当時の鹿児島県立図書館長が進行役となり、その進行役と77歳の男性二人の計3人が会話をを行っている。男性二人を本稿ではインフォーマントと位置付けるが、インフォーマントの二人共に現役時代は公的機関の長を務めた経歴を持ち、若い時から「同輩のお友達⁵」でもあったことが、テープ冒頭に進行役の解説音声として記録されている。また、進行役の男性の年齢は、話し方や声から、相応の年配者であることがうかがわれる。3人の居住地や経歴に関する情報はこれのみである。

尚、本巻のタイトルには『鹿児島市方言』とあるが、方言区分と行政区分の重なりへの言及は筆者の力の遠く及ばないところである。また、インフォーマントの二人が当該テープ内で話す方言は、鹿児島市から湾を挟んだ対岸の大隅地区出身の筆者の方言と寸分違わぬと言えるほど似通っている。通時的に見れば、このインフォーマントの語る方言も、死語となろうとする過程をたどる途上の言葉でもあろう。これらを踏まえ、本稿では研究対象の巻のタイトルの文言「鹿児島市方言」を敢えて捨て、鹿児島県を中心とした地域で広く使われる表現としての方言を「鹿児島方言」と規定し使用するものとする。

2.3 テープ内対話の話題

テープ内の談話の内容は、目録に次のように記載されている。

西郷どんと大久保どん・明治の示現流・東郷平八郎・直木三十五の小説挿し絵・パークスの日記・田中新兵衛・稽古場の注意書き・ギをいうな・幼年時代の寒稽古・英語の否定と鹿児島弁・掛け声・孫子の兵法

『方言採録テープ』のうち、雑談としての会話の内容がこれほど目録に詳細に記されているのはこの巻のみであると言ってよい。進行役がトピックを立てて会話が始まるというよりも、3人の会話が自然に明治維新前後の話になっていく様子が記録されている。これらは、幕末期から明治にかけての生麦事件、桜田門外の変、池田屋事件などにおける薩摩藩士の動きが知人の噂話のように語られており、貴重な歴史記録ともなりうるものであろう。

2.4 『共通語対訳本』と本稿の原文表記、修正提案

前述のように、当該対訳本は活字ではなく全て手書き文字で編纂されている。おそらくは音声不明であるなどの理由で文字化が困難な個所にはクエスチョンマークが書かれており、時折、筆跡の異なる文字で補足や訂正がなされている。この後日の加筆訂正をだれがいつ行ったかの説明の記述はない。

本調査の過程で当該テープを聞き取りながら対訳本を見比べていると、文字化情報に更に修正が必要だと思われる部分が散見される。本稿は、当該テープと当該対訳本の誤りを批判することが目的ではなく、その成果を高く評価するものである。であればこそ、修正が必要な部分があればそれらを逐次修正することによって、本シリーズの価値が更に高まると考える。幾つかの音声文字化への加筆と

修正を提案し、後日の評価を待ちたい。

本稿で引用する当該対訳本中の文は、本シリーズが広く検証される契機になりたいという本稿の趣旨から、当該対訳本での掲載位置が特定できるように、掲載ページと掲載行を文の番号として用いる。次の例は対訳本の第7ページの、方言のみをカウントした場合の14行目に記載されている文であることを表す。また、原文にはアクセントは表示されていないが、標準語や他の鹿児島方言と比して誤解が生じる恐れがある場合は、対訳の妥当性を担保するため、原文のままあるいは修正提案に関わらず、音声テープから聞き取ったアクセントを表す記号を付記する。アクセントの記号は木部（2000）に倣い、例のようにアクセントの上がり目を「[」、下がり目を「]」で表す。

(例) (7-14) あ] ー、[そ] う ごわん [そな] あ。

あー、 そう でしょうねえ。

3. 調査方法と調査課題

調査は以下の手順で進めた。尚、当該テープは館外貸出が禁止されているため、テープと対訳本の検証は鹿児島県立図書館内で実施している。

- (1) 方言採録テープの「目録」を閲覧し調査対象とする巻を決定
- (2) 対訳本（手書き）の資料をWordにデータ化
- (3) Wordにデータ化した対訳本の入力ミスの有無を確認し訂正
- (4) 当該テープ音声を聞きながら対訳本を読み、音声の文字化の空欄部分（不明部分）の文字化の可能性を検証し加筆修正
- (5) 話題ごとに待遇表現が現れる文とその対訳を検証

以上の作業を経て、本稿では以下の2点を課題として論ずることとする。

1. 当該対訳本上の方言音声の文字化、または対訳表現についてその妥当性を検証し修正提案を行う。
2. テープに残された会話中の待遇表現、特に終助詞の対人配慮表現を分析する。

4. 会話に現れる対人配慮表現

4.1 人間関係

まず、本章で前提となる二人のインフォーマントと進行役の人間関係を確認したい。

前述のように、インフォーマントは二人いずれも77歳の男性で、公的機関の長であった経歴を持つ人物である。進行役も現役の公的機関の長であるが、退職者と現役として幾許かの年齢差が存在することが推測できる。また、進行役は情報提供を依頼する側として、ホストの立場である。このことから、当該テープの会話では、進行役は終始インフォーマントに敬意を払う必要がある立場であると言える。

では、インフォーマントの二人の関係はどうであろうか。対訳本のp.2で、二人は「同じ土地⁶で育っておらず、ある程度大きくなってから知り合ったので、あまり遊んだりすることは（なかった）。高校では普段から漢語を使って話していた」と述べられている。つまり、日常の鹿児島方言で語り合う関係ではなかったということであろうか。その二人に、進行役が以下のように働きかける（下線は筆者。一重下線は注目箇所、二重下線は筆者による修正箇所。特に下線のない部分は正誤を問わず原文

のままである。以下同じ)。

- (4-3) 「いや、やっぱい かごっまん 男どひの⁷ 話でん ごわすな、
「いや、やっぱり 鹿児島 男性同士の 話でもですな、
(4-4) 今でやった その おまんさあどしの 言葉もごわすしな、そいから、
今でました その 同輩友人の 言葉もありますし、それから
(4-5) わいわいどしの 言葉もごわすと、で 今日はもう先生たあ
後輩友人の 言葉もあります、それで 今日はもう先生達は
(4-6) おまんさあどしじゃ ちゅうとこいで 語っただっわけごわんで。」
同輩友人だと いうことで 語っていただくわけですから。」
(4-7) 「やっぱ敬意を表してやんなあー」 「ハイ ハハハ」
「やっぱり敬意を表してですねえ」

ここで注目したいのは (4-4) の「おまんさあどし」と (4-5) の「わいわいどし」である。「おまんさあ」は「お前様」が音便化した語で、話者と同程度かわずかに上の立場にある人を、敬意を込めて呼ぶ際に用いられる二人称である。また、「わい」は、「お前」と同義の、非常に親しい間柄が目下の相手に使われる二人称である。「どし」は「同士」の音便化した語と考えられる。共通語対訳にはそれぞれ (4-4) 「おまんさあどし」は「同輩友人」、(4-5) 「わいわいどし」は「後輩友人」とされている。つまり、(4-3) ～ (4-6) を意識すれば、進行役が

鹿児島 の男同士の話でも、「おまんさあ」と呼び合う敬意を表した話し方もあれば、「わい」と呼び合う親しい友人同士の話もあります。今日は先生たちには敬意を表す表現である「おまんさあ」で呼び合うような話し方をしていただきたいのです。

と話していることになる。この進行役の働きかけを受けたインフォーマントの一人が (4-7) 「やっぱ敬意を表して」と受けるのである。滝浦 (2008) は、相手に対する呼び方はそのまま話し手が聞き手をどのくらいの距離でとらえているかを表すとても明示的な手段であるとする⁸。鹿児島方言においても、聞き手をどう遇するかが呼称によって明示される。(4-3) ～ (4-6) から、「同輩友人」には敬意を表す言葉が使用されることがわかる。本巻のタイトル『1-3 鹿児島市方言 同輩・友人の言葉』から標準語を基準として連想されるのは、日本語教育で言うところの“普通体会話”、若者が言うところの“タメ語”であるが、鹿児島方言では標準語と異なり同輩・友人同士であっても敬語的な表現が用いられるところに注意が必要である。実際に、筆者の周囲でも、卒業後30年来の付き合いのある小中学校の同級生同士が話す際の会話は、「おまんさあどし」の会話である。当該テープの前言として説明されているように「若いときから同輩のお友達」で、収録当時喜寿を迎える二人の男性が本巻において行っている会話は鹿児島方言なりの尊敬表現が基本となっていることを、誤解のないように強調しておきたい。

4.2 終助詞及びその他対訳の検証

本章では、当該対訳本において終助詞の対人配慮表現がどのように訳されているかを、目次に記載されたトピック別に会話の一部分を抽出し検証する。単文を抽出する方法を採用しないのは、共通語対訳の検証のために話の流れを明らかにする必要があることと、音声の文字化の改正提案を併せて行うことを目指すためである。

4. 2. 1 開口一番の進行役の語り

まず、本巻会話の開口一番の進行役の語りを検討する。原文を記す。

(2-1) 今から もう じーっと お話いやっとも ないどう こちこち おうはんで
今から もう ずっと 語られる? 時も、なにとぞ? こちこち なさらないで

(2-1) は対訳の2カ所にクエスションマークが書かれており、対訳者自身も確信が持てていない様子が見えるが、改めて音声テープを聞き、木部(2000)に倣って簡略化した上下イントネーションを入れてみると、次のようになる。

いまか[らもう] じ[ゆ]しと か[たい]やっとも な[い] [ど]うこうち こ[ち]
ごわはん[で]

ここで指摘できるのは、以下の点である。

まず、「じ[ゆ]しと(語る)」の「ゆ」が高いアクセントであることから、「じーっと」と文字化することには疑問が残る。「じゆしと」の意味は不明であるが、「自由に」と推察できるのではないだろうか。

次に、「お話いやっとも」と文字化され対訳が「語られる? 時も」とあるが、尊敬表現としての「お(動詞ます形)やる」の形は、管見の限り鹿児島方言には存在しない。音声の文字化の際に、「じゆしと」の語末の「と」の母音が「かたいやっとも」の語頭についてしまったものと考えられる。進行役がインフォーマントに発話を促すこの場面で尊敬表現が使用されるのは至極妥当である。鹿児島方言では「(動詞ます形) + やる」は動作主に対する尊敬表現であり、鹿児島方言話者の多くは「語る」を共通語の「話す」の意味で用いる。更に、「時も」と訳すには音声が「とも」ではなく「とッも」と促音が入る必要があると考えられる。鹿児島方言では促音が短くなる傾向があるにはあるが、この音声で「時も」と訳すことには疑問が残る。

文の後半、「ないどう こちこち おうはんで」の問題は、文節の区切りと長音のひらがな表記方法によって誤解が生じているものと考えられる。本稿では(2-1)の対訳を以下のように提案する。

な[い] → 何を(特に)
[ど]うこうち こ[ち] → どうこうとういうことでは
ごわはん[で] → ございませので

原文は次のように続く。

(2-2) ほんのこっの かごつま語を 残っせか すれば 良かとごわんで。

本当の 鹿児島語を 残せさえ すれば 良いのですから。

「残っせか」が「残せさえ」と可能表現に訳されているが、鹿児島方言の可能表現は促音化によって実現できない。ここでは「残しさえすれば」と訳すべきであろう。

以上により、(2-1) (2-2) は次のように修正することを提案する。

(2-1) ' 今から もう じゆしと 話いやっとも ない どうこうち こち
ごわはんで

今から もう 自由に お話になることも 何を どうこうという ことは
ございませので

(2-2) ' ほんのこっの かごつま語を 残っせか すれば 良かとごわんで。

(ただ) 本当の 鹿児島弁を 残しさえ すれば 良いのですから。

つまり、「これからお話しいただくことは、内容や話し方に何の規制もなく、ただお二人に自由に話していただいて本当の鹿児島弁を残しさえすればいいという趣旨の収録です」ということを説明している2文となる。

4.2.2 トピック「西郷どんと大久保どん」から

進行役とインフォーマント、計3人のうちの一人が話題を切り出す場面である。

(5-2) 西郷さあと 大久保どん] を[な] あ、

西郷さんと 大久保さんはねえ、

(5-3) こいは おんなつ ヒョ [ギッ⁹や] っとやっでや。」

これは 同じ 生地 だと ということです。」

(5-2) の当該テープのイントネーションが大久保どん[をな] あ、であれば「を」は標準語の格助詞「を」になるが、当該テープの音は大久保[どん]を[な] あであるので、この「を¹⁰」は標準語の「よ」に近い働きをする終助詞だと断定できる。この終助詞「を」は鹿児島方言話者としては、話題の取り立ての際に用い、話の続きがある場合に用いられる。

「なあ」は、標準語の終助詞「ねえ」に近い働きをする終助詞である。滝浦（2008）の説明¹¹に沿って考えると、標準語の終助詞「よ」は話し手の管理下にある命題の一方的言明であり、「ね」は聞き手への共有の確認・促しである。終助詞「なあ」は、「西郷さんと大久保さん」という話題を一方的に言明した上で、その話題に関して聞き手に共有を促す働きをすることを考えることができる。すなわち、(5-2) を“意識”すれば

(5-2) '西郷さんと大久保さんのことですがねえ

となる。

次の行、(5-3) では終助詞「や」が用いられている。「やっでや」は、《動詞「やる／じゃる（＝である）」のて形「やっで」＋終助詞「や」》で、この「や」は標準語の「よ」に近い。上述「を」との違いは、話がここで終結する印象を与え、「～んですよ」に非常に近い意味を持つ。この形態は次のように、後に理由を述べるニュアンスを持つ場合がある。

母：テスト勉強しないの？

子：テストはまだ先やっでや。(＝まだ先なんだよ。(だから勉強しないんだ。))

(5-3) の原文の訳は「～だということです」とあるが、ここは「ヒョギッなんですよ。だから・・・」と先に理由を述べ、次の(5-5) (5-6) に帰結すると考えた方が自然ではないだろうか。

(5-5) 「数えて二つ ちごと。 二つちごでどしてんなあ、 せごどん

「数えて二つ 違います。 二つ違うからどうしても、 西郷さん

(5-6) なあ、後輩にや 『おう一蔵^{いっぞう}』 ち 言いやった はっじゃっち かまっ

は、 後輩には 『おい、一蔵』 と言っていた はずだと ？

(5-7) きゃっと[な]あ。 そいから もう 大久保どんの方が[あな ^{きつ の すけ} 『吉之助さん』

それから もう 大久保さんの方からは 『吉之助さん』

(5-8) じゃったにちがいなち かんげちよっどんな、 そいをな そいしか

だったに 違いないと 考えているんですが、それを、 それしか

- (6-1) 聞いたことが ごわんと。 そい 今だあ もう我々もそげん
聞いたことが ありません。 それを 今でも もう我々もそんなに
- (6-2) かん [げ] おっと、よそしなんだ なおんこつ 対等に 芝居なんだ
考えています、 よその人などは なおのこと 対等に、芝居などに
- (6-3) 出] っくっ [と むさあ、大久保どんと セごどんと 語いやったあ やっぱい
出てくる、 大久保さんと 西郷さんとが 語り合うのは やっぱり
- (6-4) 対等に 語ってな]・・・」
対等に 語って・・・」

滝浦 (2008) は、終助詞は日本語の会話において全発話単位 (ポーズで区切られた発話単位) の約 1 / 3 に現れると述べている¹²が、上のやり取りではほぼ全ての文に終助詞が用いられていることが興味深い。

(5-5) (5-7) (6-1) (6-2) で終助詞「と」が現れる。「と」は、標準語「～んです」の「ん」に近い機能を持つ。話し手の一方的な言明・説明を行いながら、聞き手への配慮あるいは話者の遠慮が込められていると見る。「と」の持つ聞き手への配慮機能は、目上に対する尊敬といった狭義の敬意ではなく、一方的な言明が聞き手に与える衝撃を和らげるような機能としての配慮であるというのが筆者の感覚である。尚、(6-3) の「出っくつと」の「と」は、筆者のイントネーションのメモが正しければ、接続詞・確定条件の「と」であり終助詞の機能は持たない。

(5-5) (5-7) (5-8) (6-4) の「な」はいずれも (5-2) の「なあ」と同様の、標準語の「ねえ」に近い、聞き手への理解の共有・促しの機能を持つと考えられる。

(5-6) ～ (5-7) では「かまっきゃつとなあ」と、「と+なあ」が現れる。この形は標準語の「よねえ」と同様の接続形である。

以上の分析を踏まえ、音声の文字化を見直した上で終助詞の意味を明示させるために、次のような修正を提案する。

- (5-5) '「数えで二つ ちごと。 二つちごでどしてんなあ、 セごどん
「数え歳で二つ 違うんですよ。 二つ違いますからどうしてもですね、 西郷さん
- (5-6) 'なあ、後輩にな 『おう一蔵』^{いっそう}ち 語いやった はっじゃっち かまっ
は、後輩には 『おい、一蔵』^{いっそう}と言っておられた はずだと (不明のまま)
- (5-7) 'きゃあつと[な]あ。そいから もう 大久保どんの方が[あな^{きつ}の^{すけ}』
それから もう 大久保さんの方からは 『吉之助さん』
- (5-8) 'じゃったにちがいなち かんげちよっどんな、 そいをな おせんしかあそ
だったに 違いないと 考えているんですがね、それをですね、年配の方々から
- (6-1) '聞いたことが ごわしと。 そい 今だあ もう我々も そえん
聞いたことが あるんですよ。それを 今では もう我々も そんなに
- (6-2) 'かんげおつと、よそしなんだ なおんこつ 対等に 芝居なんだ
考えているんです、県外の人などは なおのこと 対等に、芝居などに
- (6-3) '出] っくっ [と おまんさあ、大久保どんと セごどんと 語いやったあ やっぱい
出てくると、 あなた、 大久保さんと 西郷さんとが 話されるのは やっぱり

(6-4) '対等に 語ってな]・・・」

対等に 話してですねえ・・・」

終助詞は話者のモダリティーを表す重要な機能を持つ。方言の意味を後世に残すためにも、一つ一つの終助詞の意味を確実に対訳として残しておくことを提案したい。

ここまでに現れた終助詞の形、機能、訳を整理すると、次のようになる。

表1 終助詞「を」「な」「や」「と」

	鹿児島方言 終助詞	文例	終助詞の機能	当該対訳本の 訳	標準語 (対訳案)
1	を	(5-2)	話し手の一方的言明 ・話題が続く ・聞き手への敬意 (+)	(なし)	ですよ
2	なあ／な	(5-2) (5-5) (5-7) (5-8) (6-4)	聞き手への共有の確認・促し ・聞き手への敬意 (+)	(なし)	ですねえ
1+2	をなあ	(5-2)		(なし)	ですよええ
3	や	(5-3)	話し手の一方的言明 ・原因理由の前提 ・聞き手への敬意 (-)		んですよ
4	と	(5-5) (5-7) (6-1) (6-2)	話し手の一方的言明 ・話題の帰結 ・聞き手への敬意 (+)	(なし)	んですよ
4+2	と+なあ	(5-6)~(5-7)		(なし)	んですよええ

(6-5) 以下は次のように続く。

(6-5) 「あんようをね、そいかあ ひとつちごてん ちごたたったで」

「あのですね、それから 一つ違っても 違ったのだから」

(6-6) 「数がちご ちゅうとをな・・・」

「数が違う というのをですね・・・」

(6-7) 「小説 [書ん] しがですね そい知らん もんやっで 対等に・・・」

「小説を書く人がですね、それを知らないものだから、対等に・・・」

(6-8) 「我々もなあ そいは いままで気付かんやったとが あつもんなあ。」

「我々もねえ、それは 今まで気付かなかったのが ありますよねえ。」

ここでは「なあ」と「ね」が混在し、方言が標準語化していく流れの一つであることが推察される。(6-7) は原文では「小説書んしがですね:(訳) 小説を書く人がですね」となっているが、イントネーションから「小説家んし:(訳) 小説家の人々」と判断する。また、「し」は「衆」の音便化したものであるが、標準語では「衆」が明らかな集団、すなわち複数の人を表すのに対して、鹿児島方言では一人の人物について話すときも敢えて「し」と複数の人のように語ることで敬意を込めることがある。

一部ヨーロッパで話される言語の呼称で、敬意を表す呼称として二人称単数に二人称複数を用いることがあるが、それと同様の配慮が鹿児島方言の「し」にはあるのではないかと筆者は推察するが、これについては機会を改めて考察したい。

会話は続く。ここでは当該テープの音声文字化と終助詞に配慮した対訳の本稿による修正提案を目的とするため、説明を割愛し提案の提示のみとする。

(7-1) 「今まで隆盛さんが機嫌が悪ごしたあ。」

「今まで隆盛さんが機嫌が悪かったですねえ。」

(7-2) 「じゃろごわんそなあ。 もう そいはもう かなちっ そいじゃっと。そいで
「そうでしょうねえ。 もう、それはもう ? そうでしょうよ。それで

(7-3) しかも おまんさあ おんなっ しょぎで ふたっ違えば おまんさあ
しかも あなた、 同じ 生地で^マで 2歳違えば、あなた、

(7-4) さあ 対等に し] やな [ら] せんと。
それは対等に することはできませんよ。」

(7-5) 「あー、そう ごわんそなあ。」
「あー、そう でしょうねえ。」

(7-6) 「そいで ずっと やっぱいな 晩年に なられるまで 個人的な
「それで ずっと やっぱりですね 晩年に なられるまで 個人的な

(7-7) つき合いでは 大久保さんが どしてん やっぱい ^{ひとかぶ}一株おいて
つき合いでは 大久保さんが どうしてもやっぱり 一株おいて

(7-8) おいやったのではねえと 思っおとなあ。 なあ もう西郷さんの
おられたんのではないかと 思っているんですよ。 それは もう西郷さんの

(8-1) 方が やっぱい おいちゅうようなふに じゃっつろご
¹³方が やはり 「おい」というふうに (呼びかけて) いたように

(8-2) あっとやっどんから 公の場じゃ そや かんげが ちごもんそでなあ。
思われるんですが 公の場では また 考えが 違うものでしょうからねえ。

終助詞「な」と「と」の違いは先述したが、(7-2) で更に確認できる。すなわち、「じゃろごわんそなあ」と話しかけてきた相手との情報共有を確認し、その情報を自分の情報として言明できるほどに理解したことを表すために「そいじゃっと」と述べており、下のBと同様の論法である。

A：暑いですねえ。

B：ええ、暑いですねえ。ほんとに暑いですよ。

(6-3) でも現れた話途中で相手に呼びかける「おまんさあ」が、(7-3) では、2回現れる。この「おまんさあ」の働きは三遊亭圓生の落語「浮世風呂」の“おばあさんの長口上”にその特徴がよく表れている。このおばあさんは公衆浴場での世間話の中で、聞き手の迷惑を考えず自分の話を滔々と語る。

「まことにまあまあ本当に、もうお伺いをしなければならぬと言ひ暮らしてござりましてついつい、ま、もうご無沙汰がちになって申し訳が、いいえ、あなたねえ、いろいろお世話になって、

お礼に出なきゃならないならないで申していながら何しろあなた、暮れのうちは用が多いものでございますから、とてもお伺いもできない春になったら是非とも、まあごあいさつに出ようと思っておりましたところがあなた、まあ女の子が多いものでございますから、・・・」(SONY ミュージック、『圓生百席③』DISC2「浮世風呂」より)

このように談話の途中で「あなた」や「おまんさあ」と呼びかけることは、他者に受け入れてもらうための戦略である。言い換えると、「あなた(おまんさあ)」と話し途中で呼びかけることで、聞き手との情報共有の確認あるいは理解を促す働きをするもので、標準語の「ね」、鹿児島方言の「な」と似た働きを持つ。本巻全編を見ると、この「おまんさあ」が文字化される際に「むんさあ」と表記されたり省略されたりし、当然ながら対訳に表れてこなかったりする場合が散見される。鹿児島方言のモダリティ表現を残すという意味では残念に思われる。

4.2.3 トピック「明治の示現流」から

話題は続いて、薩摩の伝統武道である示現流の稽古場の話に移っていく。

- (9-1) 「そい やっぱい かんまつ¹⁴と そいかあ 先生ん¹⁵ たかん馬場ん
「それは やっぱり 上町と それから 高見馬場の
(9-2) 辺とは いろんな ちごととこいが あったもんごわんそかい、昔や。」
辺とは いろんな 違ったところが あったものでしょうか、昔は。」
(9-3) 「昔やね ちごっおしたが だいぶ、そうすつと たかん馬場ん
「昔は、違っていました、だいぶ。そうすると 高見馬場の
(9-4) 辺と かんまつ¹⁶の辺とは また ちごと。 あたいなんだ山下小学校
辺と 上町の辺とは また違うんです。 私などは 山下小学校
(9-5) を出もしたがな、あいから たかん馬場ずいの 間が 途中で つごどん
を出ましたがね、そこから 高見馬場までの 間が 途中で 東郷流
(9-6) のけこ場なんどが あいせえな、しいかあちいいごっ 聞こえちよつもんごわしたが
の稽古場などが あって、後ろからついてくるように 聞こえているものでしたが、
(9-7) ? あとから聞けば やっぱい 樺山どんたっが 一生
あとから聞けば、やっぱり 樺山さんたちが 一生
(9-8) 懸命たかん馬場ん ^{りゅうてい}柳庭書院ち やなつのっが あつとこい
懸命 高見馬場の 柳庭書院という 柳の木が あるところで
(10-1) でな、柳庭書院ち 名前が つけあつたらしいがを。」
柳庭書院と 名前が つけてあつたらしいですよ。」

(9-2)「ごわんそかい」を分解すると、①「おわす」の音便化した「ごわす」、②推量の助動詞「そう」、③直接的な疑問の助詞「か」ではなく婉曲な疑問「かい」、の3部分から成る。「～ですか」ではなく「～のでしょうか、お考えがありますか」というニュアンスを含む非常に奥ゆかしい質問形式であると考えられる。

(9-3)「むかしやね」の「ね」は標準語の「な」と同様の機能を持つ。

(9-3)「ちごっおしたが」の「が」は標準語の接続助詞の「が」と非常に似てはいるが微妙に異なり、標準語の「が」よりも強く終助詞としての機能を持つ。原文の訳は的確であろう。終助詞「が」

に関して例文を比べよう。次の鹿児島方言の3文はいずれも「天気予報で雨が降ると言っている」という事実を伝える文であり、いずれも標準語の「～ですよ」に訳せる機能を持つ文である。

- (1) 天気予報で雨が降っち [ゆ] うと。
- (2) 天気予報で雨が降っちゆう [ど]。
- (3) 天気予報で雨が降っち [ゆ] うが。

この3文をあくまでも筆者の方言話者としての感覚で分析すれば、(1)では単に天気予報で言っているという事実説明、(2)は“天気予報で言っているという事実は伝えたよ、あとはあなたの好きにきなさい”というニュアンスを持ち、聞き手への敬意はない、(3)は“天気予報で言っているけどあなたはどうするんですか？”と聞き手の対応を期待するニュアンスを感じる。(3)を標準語の「雨が降ると言うが／けど」と訳すとニュアンスが異なってしまう。この「が」を接続助詞と捉えるか終助詞と捉えるかは判断が分かれそうだが、大切なことは助詞の命名ではなくその意味や機能を分析することにあるだろう。

(9-4)「ちごと：(訳) 違うんですよ」の「と」は前述のとおりである。

(9-5)「～がな」と(10-1)「～がを」は、終助詞の接続と見ることもできる。

話題は更に示現流のうち“御家流”とされる流派の東郷流と、そうでないとされる薬丸流の話になっていく。

(12-4)「先生は そすと どっち」を おっし [や] ったわけですか。」

「先生は そうすると どちらを やられたわけですか。」

(12-5)「あたいは つごどんの方」

「私は 東郷流の方」

(12-6)「つごどん [の 方] した [と]」

「東郷流の 方を したのですか。」

(12-7)「はい、ちんけとっから やっぱい 舍でも やっぱい やいおったでな。」

「はい、小さい時から やっぱり 舍でも やっぱり やってましたから。」

(12-4)の「やられた」という尊敬語としての対訳は的確である。先生と呼ぶ相手に尊敬語を用いない会話は鹿児島方言ではあり得ないと言ってよい。そうであれば、文字化の原文は「どっちをおっしやった」ではなく、「どっちを しやった(するのます形+やる=尊敬動詞)わけですか」となるべきであろう。同様に、(12-6)の当該テープを聞くと「つごどんのほうおし [や] ったと」と聞こえ、対訳も尊敬表現を用いて「東郷流の方をなさったのですか」とするべきではないか。

(12-6)の「と」は、表1の「と」とは異なり相手の述べた内容を確認する機能があるが、相手の話を納得したことと言明と考えると「のです」の一つであろう。

表2 「が」「ど」

	鹿児島方言 終助詞	文例	終助詞の機能	当該対訳本 の訳	標準語 (対訳案)
4'	と	(12-6)	話し手の言明 ・相手の情報の納得 ・聞き手への敬意 (+)	～ですか	～ん/のですか↓ ※質問の意味は ない。
5	が	(9-3)	話し手の言明 ・聞き手の対応を期待 ・聞き手への敬意 (±)	(なし)	～よ
6	ど	-	情報の伝達 ・対応は聞き手任せ ・聞き手への敬意 (-)	-	～よ
5+2	がな	(9-5)		がね	がね
5+1	がを	(10-1)		ですよ	

(12-4) ～ (12-6) の修正提案を示す。

(12-4) '「先生は そすと どっち」を し [ゃ] ったわけですか。」

「先生は そうすると どちらを なさったのですか。」

(12-5) '「あたいは つごどんの方」

「私は 東郷流の方」

(12-6) '「つごどん [の 方] しやった [と]」

「東郷流の 方を なさったのですか↓。」

4. 2. 4 トピック「東郷平八郎」から

話題は東郷平八郎と示現流の関係で続いていく。薬丸流と東郷流では全て反対のことをしていたという話から、薬丸流では木を横にして稽古をし、東郷流では木を立てて稽古をしていたという。屋敷の裏に木を立てて、

(18-5) (前略) そいで やっぱい そんてむこっせいな

それで やっぱり それにむかって

(18-6) 振るい[や]ったち。」

振るっていました。」

(18-6) の「ち」は伝聞情報であることを表し、標準語における引用の「と」が音便化したものであると考えられる。「ち」の一音で、「～そうですよ (伝聞)」と同様の機能を持ち、情報を伝える話し手自身に情報に関する一切の責任がないという姿勢の場合に用いられる。

表3 終助詞「ち」

	鹿児島方言 終助詞	文例	終助詞の機能	当該対訳本 の訳	標準語 (対訳案)
7	ち	(18-6)	伝聞情報を伝える ・ 情報への責任なし	(なし)	～そうです

話題は続く。東郷平八郎は鹿児島で葉丸流の示現流剣法を習っていた人物であるが、その稽古をしていた棒が東郷が元帥になった後にも東郷宅の庭に立っていた。それを見たインフォーマントの一人がこの棒で元帥の武道の程度がわかるから大事にしてほしいと事務所に伝えたところ、二度目にそこに行くと棒がない。以下、原文である。

(19-8) (前略) 2度目 行った

2度目に 行った

(20-1) とこいが なかとごわんでを、うにゃ こいは やっけなもんじやと
 ところが ないデスヨ、 いや、 これは やっかいなことだと

(20-2) 思っ また行たっおいせえ、 こん棒は なかと ごわすかち聞いてな、
 思い、また (事務所に) 行ってから この棒は ないの ですかと 聞いてデスネ

(20-3) 非常に意味のある 棒だそうですから 来たいっかし¹⁷
 非常に 意味のある 棒だそうですから 来て 一回しか

(20-4) 出さんとじゃっち。 かねちゃ 前んろ 前ゆたち？
 出さないということです。 平常は

(20-5) 大事にしごわんでちゅやったあ そうごわすか そいなあ
 大事にしていますと言ったから、 そうですか、 それなら

(20-6) 大事にしよったもして、 そんな こっが ごわしたがああ。
 大事にしていたでしょうに、そのようなことが ありましたねえ。

(20-4) の「ち」は前述の通り、話者に責任のない伝聞情報を表す。「かねちゃ 前んろ 前ゆたち」は、音声を聞き直すと「かね [ちゃ] な [え] ちよったっち」と聞こえる。

また、(20-5)「ちゅやった」は尊敬動詞であるが、当該テープを聞き直すと「ちゅやっでや」と聞こえる。ここで (20-5) 'を「ちゅやっでや」と訂正提案し、再び終助詞「や」のについて分析する。この「や」が伝える情報は話し手の管理下にあり、話し手からの情報の言明であるので、表1の「や」と同じ「や」である。但し、「や」そのものの敬意の低さから、では今さら聞いても仕方がないという意味、引いては命題に対する諦めやからかいのムードが含まれるようである。

(4) 天気予報で雨が降っちゅうたちゅでや。

≡「天気予報で雨が降ったと言った」と言うんですよ。(今さら言っても……)

同様の「や」はp.22とp.25にも現れる。

(22-3) わがでんな やっおって とどっつ かんげ出すと 相手ん顔を
 自分でも やっていて 時々 考え出すと 相手の顔を

(22-4) 見っと オイも あげな つらをしおっどね と 思っ・・・ ?
 見ると オレも あんな 顔をしているのかなあと 思っ・・・

(22-5) がっつい おかしこつが あっでや。」

本当に おかしいことが あるから。」

この「や」には、示現流の稽古を真剣にしているときの自分の顔を想像し、自分自身をからかって
いる気分が表れている。また

(25-5) に型をしてもらってな スケッチをしやったこつが ごわはんがをち、

に型をしてもらって スケッチをしたことが ありますよと

(25-6) そげん ゆでや¹⁸。 ほいなら わかったち あたいが ゆたとな。コウコウ・・・

そんなに言った。それなら わかったと 私が行ったのです。コウコウ・・・」

この「や」には、自分がかつて教えたことを重大そうに自分に言って聞かせる事務所員を揶揄する
気持ちが表れていると思われる。

(20-6)「しよったもし」は「しやったもんせ(＝なさってください)」が音便化したものと考えら
れ、原文の表現「していたでしょうに」は「もし」を仮定と勘違いして訳されたものであろうか。

以上の推論をまとめると、(19-8)～(20-6)は、「二度目に事務所に行って棒の所在を聞いたところ、
『非常に意味のある棒だそうなので普段は大切にしまっている』と言う(それを指摘した自分とし
てはそれがおかしかった。)。『それならどうぞ大切にしてください』と私が言ったことがありました。」
という物語になる。(19-8)～(20-6)の修正提案を示す(『は筆者による。))。

(19-8) '(前略) 2度目 行った

2度目に 行った

(20-1) 'とこいが なかとごわんでをな、うにゃ こいは やっけなもんじやと

ところが(それが) ないんですよ。いや、これは たいへんなことだと

(20-2) '思っ また行たっおいせえ、 『こん棒は なかと ごわすか』ち聞いてな、

思ひ、また(事務所に)行ってから『この棒は ないの ですか』と聞いたらですね

(20-3) '『非常に 意味のある 棒だそうですから 来たいっかし¹⁹

『非常に 意味のある 棒だそうですから 来て一回しか (不明)

(20-4) '出さんとじゃ』っち。 『かねちゃ なえちよったっ』ち。

出さないのだ』というのです。『普段は しまっているのです』と。

(20-5) '『大事にしごわんで』ちゅやっでや 『そうごわすか そいなあ

『大事にしているんです』とおっしゃるんですよ、『そうですか、それなら

(20-6) '大事にしよったもして』、 そんな こつが ごわしたがあな。

どうぞ大事にしてください』(と私が言った)、そのようなことが ありましたがねえ。

4.2.5 トピック「直木三十五」から

話題は桜田門外の変に移る。ここは原文と当該音声の文字化が筆者の聞き取りと食い違うところが多
いので、筆者の提案を以下に示すのみとし、後の批評を待ちたい。

(29-4) 「そいで 池田よねおさんと いおしたがあ もし こいが やい

「それで 池田米男さんと 呼んでいましたがあ、もし これが 失敗

(29-5) そののたときゃ 村田どんが 鉄砲で いっきやいつもいやったち、二段構えをな、

したときは、村田さんが 鉄砲で 行かれるつもりだったそうで、二段構えですよな。

- (29-6) そいで ところが もう あそこで しとめやったもんじゃって、村田どんな
それで ところが もう あそこで しとめたもんですから、村田さんは
- (29-7) 鉄砲を 持って いかじすんだわけよなあ。 そのとつが 駕籠回り
鉄砲を 持って いかにすんだわけよなあ。その時が 駕籠回り
- (29-8) が留守になったちゅを 非常に 心配をしたのが ^{まっかた}松方さんやったち。
が留守になったということを 非常に 心配をしたのが 松方さんだったそうです。
- (30-1) せごどんがな ^{まっかた}松方一、
西郷さんがですね、松方一
- (30-2) だいか ゆたち。そいかあ わいやー あんときゃ わいたあ
誰かが言ったと。そして、お前は あの時は、お前たちは
- (30-3) 駕籠んわき ちっおいせえち ゆっせえな、せごどんが せんゆやった。
駕籠の脇に ついておいてと 言ってですね、西郷さんが そうおっしゃいました。
- (30-4) そんな話ば聞いてな、もうあんどつが おまんさあ、そいでな こう
その話を聞いてですね、もうあのときが、あなた、それですね、こう、
- (30-5) ? ねっから 斬ったしは やつまどんの
すべて 斬った人たちは 薬丸流の
- (30-6) しじゃ 腕きっのしが うおごわんさあ。
人の中では 腕利きの人たちが多かったんですよ。

5. 終わりに

本稿では、鹿児島県立図書館編纂所蔵の『方言採録テープ』から『1－3鹿児島市方言 同輩・友人の言葉』の『共通語対訳本』を検証し、そこに現れる終助詞の対人配慮表現を中心に分析を行った。考察できたのは、提出順に終助詞の「を」「な」「や」「と」「が」「ど」「ち」である。鹿児島方言の対人配慮表現は更に複雑で大きな体系を持ち、本稿で分析できた対人配慮表現は、膨大な資料ではあるがそれでも限られたコーパスのごく一部分にすぎない。その本稿の分析でさえも、同一音の終助詞の機能分析、意味が類似する終助詞の機能分類がほとんど手つかずである。

また、この分析の過程で発見された音声の文字化について、いくつかの修正提案をした。一つの音を聞き逃すことで対訳が本来の意味と反対の意味に解釈されている部分も発見され、音便化現象が頻出する鹿児島方言の文字化の困難さがうかがえた。すなわち、(1)音源が不鮮明である、(2)固有名詞の確定が困難である、(3)音として聞き取れた言葉を意味のある言葉にすることが困難な場合がある、(4)音便化した発音の表記方法の統一が困難である、などの点である。筆者自らも分析中にその困難さを再認識し、本稿自体にも表記や修正提案にも更なる校正が必要であることを痛感する。

共通語対訳に関しては、日本語教育の立場から終助詞の持つ対人配慮のモダリティを残すための微細な修正提案を行った。対訳に関しては、今後、音声の文字化を適正に行うことで一定程度まで精度を上げることができるであろう。しかし、個々人の持つ語彙や方言感覚には限りがあり、正確な記録を残すには方言の専門家や方言話者がチームとなり更なる検証をすることが必要なのではないだろうか。当該対訳本を分析する過程で筆跡の異なる文字による修正や加筆が散見されたことは、その証左であろう。

この『方言採録テープ』シリーズとその『共通語対訳本』は音声を文字化し丁寧に逐語対訳された非常に貴重な資料である。児玉（2010）が指摘するように、この音声データは現代及び次世代の音声学研究者、方言学研究者にとっても重要な資産である。と同時に、鹿児島方言話者にとっては内容的にも非常に興味深く読み物としても楽しむことができる。本稿1. で述べたように歴史資料としても言語分析資料としても、自らのアイデンティティを探究するための精神的支柱としても、貴重な文化財産である。筆者のような門外漢が本稿により修正案を提出したのは、その貴重さへの敬意に他ならない。

重ねて述べるが、本稿は『方言採録テープ』を批判するものではなく、むしろ当該資料の貴重さを痛感しそれを広く知らしめることを本意とする。そうであればこそ、音声としての方言研究ではなく、対人配慮のモダリティ表現としての方言を自らの言葉で語ることができる方言話者が生存する今のうちに、音声、文法、日本語教育、方言話者等、様々な立場からの採録テープと対訳の見直しをしておくことを提言したい。

謝辞

本研究の資料のためにご協力ご尽力いただいた鹿児島県立図書館、本学ライブラリー職員各位に心より御礼申し上げます。

【注】

- ¹ p.79参照。
- ² p.49参照。
- ³ この対訳本の数には、本『方言採録テープ目録』上で「要改訂」「厳密ではない」「途中から」という備考のあるものも含む。
- ⁴ 標準語：国の規範となる言語として、公用文や学校・放送・新聞などで広く用いられるもの。日本語では、おおむね東京の中流階級の使う東京方言に基づくものとされている（広辞苑第六版より）
- ⁵ 原文のままの表現。
- ⁶ 対訳本には「同じ生地で」とあるが、鹿児島方言の音が「ショギッ [デ]」とあるので、「生地」の対訳が正しいかには疑問の余地が残る。
- ⁷ 原文では「ところなしとん」。筆者の音声聞き取りにより「オトコドヒ」と修正する。
- ⁸ p.104参照。
- ⁹ 原文は「しょうち」。「ヒョギッ」と聞こえるが、いずれの場合も「生地」と訳せるのかは筆者には不明。
- ¹⁰ 「を」ではなく「お」とする研究も多いが、ここでは原本に沿って「を」と表記する。
- ¹¹ p.138, p.140参照。
- ¹² p.96参照。
- ¹³ 原文では対訳はなし。聞き取れなかったことから訳ができなかったと思われる。
- ¹⁴ 「かみまち」ではなく「かんじゃまっ」（＝加治屋町）の誤りではないかと考えられる。
- ¹⁵ 原文は「せせん」。正しくは「先生ん」（＝先生の）であると考えられる。
- ¹⁶ 注13に同じ。
- ¹⁷ 原文通りでは矛盾があるが、聞き取れなかった。
- ¹⁸ 原文は「ゆた」。テープ音声を聞いて「ゆでや」と修正する。
- ¹⁹ 原文通りでは矛盾があるが、聞き取れなかった。

【参考文献】

- 井上優 （2002）「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21(2)：48-57
- 木部暢子 （2000）「鹿児島県鹿児島市方言の副助詞」『方言資料叢刊』8：281-286
- 児玉望 （2010）「方言音声コーパスの韻律構造表示～鹿児島県立図書館方言採録テープの分析～」『熊本大学言語学論集ありあけ』9：1-28.

滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社

中西泰洋 (1993) 「文末詞の待遇的な機能についての一考察」『神戸大学留学生センター紀要1』: 77-

94